
月 刊

MéLange

Vol.133



2018.05.27

詩と評論

月刊「Mélanges」

Vol.133 2018.05.27

「月刊めらんじゅ」編集部

詩・俳句

ひ かるみこ／うつ せみ ……………中堂けいこ 03
 マンホール……………中嶋康雄 04
 不思議な三つの風景 ……………高木敏克 05
 つらぬき／しとやか ……………大橋愛由等 06
 ある日東京で……………月村 香 08
 春うらら 夢想（俳句） ……………岩脇リーベル豊美 09
 ときのまうえから From Above the Time ……………北岡武司 10
 始まりと終わりのない記憶／※ V ……………高谷和幸 12
 狭間は母里にあった ……………大西隆志 13
 階段の踊り場から—高谷さんへ／ナンデェという丘から ……………木澤豊 14

書評

福田知子詩集『あけやらぬ みずのゆめ』を読む……………野口 裕 11

連載／エッセイ

神戸詞あしび 122 「沖縄文学の戦前戦後の断層は今でも続いている」……………大橋愛由等 16

表紙の写真は、春まだき。神戸市三宮の街路樹（撮影・大橋愛由等）
 第133回「Mélange」例会の読書会は、詩人月村香氏の「キルケゴールの語り」

編集部日より★52／詩友が持っていた詩集に注目した。T・S・エリオット詩集『荒地』。いまさらながらという感じもしたが、岩波文庫として出版されていることを知らなかったので、この際読んでみようとしてジュンク堂書店に向かった。読んでみると、エリオットの詩法がぐっと心に響く。「端的に言えば、第二次大戦後の日本の現代詩は、T・S・エリオットの『荒地』から出発した。」（同書「解説」岩崎完治）と書かれているように、わたしの詩のありかたにも、「荒地」的詩法、つまり日本の戦後詩が積み重ねてきた詩のあの方が息づいていることをあらためて確認した。詩集『荒地』は出版されてほぼ100年が経過しているので、多くの研究者がこの詩集の分析と解説を試みている。細部にわたって詩の背景が語られ分析されている。言ってみれば「荒地」は間テクスト性によって紡がれた西洋の詩劇なのかもしれない。特に何度も読んだのは、「II チェス遊び」。会話を交わしているようだが、会話になっていない。独語を重ねたようなひととひとの実体なき「会話」の実相が浮かび上がってきている。／第133回読書会は、「Mélange」詩友・月村香さんの「キルケゴール語り」である。（大橋愛由等記）

◆ ひ かるみこ

中堂けいこ

ほお、ほおにむかう テレビの雑雑の
 いくらない女御のおはなしはそのままほおから、
 しずむ黄色いほん
 ほん 二本
 六百有余の枚数をかぞえながら
 ほおは読みきる期限をつける
 司書はかるい口調で お返しください
 くださいのていねいに とまどう
 お返しください あ、あなたは誰の所有か
 あ、まちがい、本は誰の所有かと
 ほお、汗ばみうつむく声は
 きれいにのみこまれわたしは身体ごとふくらみながら
 息を吐き出しているのだ

やつとシール印刷ができてあと半年はわたしの棲処は読まれ続け
 ることだろう
 さしこみ印刷はまたわすれるだろう またわすれて
 わたしの名と棲処をわすれて
 シール番号とフォントをどうやってさがすのか さがしの方法を
 わすれて

あ、そのおはなしを幾度終えたか行く千年に母の手のなかの対訳を、
 あ、宇治から先生が、むなしくなりました

◆ うつ せみ

中堂けいこ

そのようにあらわれては 四方の壁はみずびたしになり
 父と母の足元にちいさくはねるかれら 黒い塊りは
 蝶の蟬の裏戸の灯籠の、の、格助詞におぼれるわたしの手から
 かりみをすべらせ ひとつぎりの器になるのを、

◆マンホール

中嶋 康雄

真つ黒な身長は伸び縮みしている
道路にはいやな音と臭いが満ちあふれて
マンホールが笑いながら
太い舌をぶらぶら揺すって踊っている
アスファルトの粒が流れている
粒は仮想通貨になり
カチャカチャと全てを値踏みしている
暗闇に空き缶が買い与えられ
暗闇より黒い税務官吏が
道路の中を泳ぎまわっている
マンホールのふたの裏側のぎざぎざには
マンホールが無数に生まれ
幾重にも幾重にも重なり合い
もう貧乏ゆすりもできない
大将が鉄をチャリチャリ鳴らして
マンホールをぶった切ろうとするが
怒ったマンホールに両足をもがれて食べられ
咀嚼に終焉はない
マンホールが去った後
残った穴は永遠に飯のママのまま揺らめいている
飯の気楽さは快感放題
マンホールの天井に蝸集する発光
堰き止められた汚水が照り輝いている
マンホールがふたを投げて攻撃する
飛び交うマンホールのふたは真つ赤で血が滴り
ハンバーガーショップの窓も真つ赤になっっている
本部から用意されるもたつくミンチ肉だけでは足りないから

◆不思議な三つの風景

高木敏克

◇浮森
君が死んでしまっているのに僕がまだ生きているということは、それだけで不思議な風景なのに、君はまた言った。
「不思議な風景ねえ」
三木市別所町の辺りを車で走っていると、五月なので田に水がはられていて、山際まで水鏡が鈍く光っていた。
「ねえ、山が水に浮かんでいるわ」
「ほんとだ、水面と山の間には確かに闇のすき間がある」
「ねえ、山がいま少し動いたわ。やっぱり山は水に浮かんでいるのね。わたし見てくる」
君は山に突き刺さる一本のあぜ道を足音もなく歩いてゆくと、闇のすき間に曲がりくねった小径をみつけたみたいだ。僕は君を追う。悪い癖だ。黙ってどこかに行ってしまう君の悪い癖だ。

◇柳田猫の目

君の住んでいるところは地名のないところなのに、君はまた言った。
「ねえ、今見た。不思議な地名ね」
能登半島の先端を目指していると、道は途中から真の闇に包まれていた。他には何も見えないのに、柳田猫の目という世界に一つしかない地名があらわれた。振り向いても闇の中には柳田猫の目がある。
私は年老いてあれが能登半島なのか丹後半島なのか、君が妻なのか恋人なのかわからなくなってきた。すべては闇の中に消えてゆくみたいだ。
「わたしは、ずっと恋人よ。柳田猫の目は丹後半島と能登半島の間にあるわ」

そこにいる人間のお客をどんどん捕獲しづつ切りにする
マンホールがかぶりついている
マンホールが太鼓腹の巨大な親父をそのまま追い詰めている
マンホールの下水が荒れ狂っている
残された大量のパンツが大量の下水を吸って
暗黒を配っている
行き場はない
マンホールのふたの模様が
販売スタッフの毎度毎度のむくろの笑顔にすら
もよおしてもよおして怒張し
丸い軀から這い出て蠢いている
スルスルと地方自治体のマークもほぐれ
販売スタッフに巻き付き命令する
命令は非常に強いが
何をすればよいのか
さっぱりわからない
マンホール本体が電磁波を呼んでいる
販売スタッフが裸踊りをしながら溶けている
マンホールと販売スタッフがキスをするが
溶けて境目がなくなっている
あらゆる接合部位がくっついたまま離れない
くっついたまま薄明の店舗に出勤する
店舗は時代遅れで薄給だ
商品に指を噛み切られる
止血のために薬が塗られる
ああ気持ちいい
身体中ぶくぶく泡立っている
毎日ほとともうれしい
スタッフが笑っている
マンホールが笑っている
マンホールのふたも笑っている
丸い笑いを

「ああ、わかったよ。君はそのあたりにいるんだね」
ケイタイが切れちゃった。

◇狐塚

子供の頃、僕は真つ直ぐに窓の外を見ていた。谷は一見すべて人間に征服されているように見えたが、狐塚の周辺には僅かばかりの自然が残されており、名前のよく分からない黒い樹木が風に騒いでいた。それは透明な風に揺れているというよりは無数の黒い枝で何かを手招いているように見えた。突き抜けるような月夜の下では繁みは闇の怪物のように見えていた。山の木々が谷に向かって今にも襲いかかりそうな勢いで自分たちの子供を捜しているように見えた。そのため、谷がほとんど大きくなると僕もそれに釣られてほとんどと浮き上がってゆくのが分かった。自分というものがくつきりとした闇の塊になり、ほとんど大きくなってゆく。僕は月明りの中で、はつとしてやがて恐怖のために震えだしたので。生きるということは、耐えられないことだが、ほとんど大きくなってゆくことなのだ。体がどんどん大きくなり、まったく何の面白味もない領域に自分の生命がはみ出してゆく。勉強だとか仕事だとかいう、生命にとつては楽しみからかけ離れたところに、大人という存在の位置があるのだとすれば、大きくなることはなんて恐ろしいことだろうか？大人なんて夢を消す闇のようなものだ。そう思うと僕の身体は鉛のように重たくなって沈みそうになる。僕はそう言う夜には石のように小さくなって蒲団の中に潜り込んだものだ。その大きくなる恐怖に比べたら、何時までも小さなまま蒲団の中からは出ないことの方がどんなに幸せだろうか？例えそのまま死んでしまうことがあっても、何もしいまま小さくなる方がどんなに幸せだろうと思うことがあったのです。そう思っ僕はこの谷に帰ってきたのですが、でも、僕の生まれ育った当時の谷はもう埋まっています、闇の中にしかないのです。帰ろうと思ってももう帰る所はないのです。僕の幼年期も少年期も時間の闇と空間の闇の中に埋め尽くされています。帰ってきてても自分自身にさえもう会えないのです。

◆つらぬぎ

大橋愛由等

スクウェアにて残滓が残滓のまま笑っている
（ためらいながらアンゲロニアが口を開くには「悠然と存在する球体はそれ自体羞恥を忘れて外在している」と整理筆筒の上から二番目の引き出しに広がる悠久の海原の中の青黒い島で自然に生えている風の雫をわたしに見せようとしているので「アンゲロニアよ、きみが左から三番目の列柱に口伝しようとした詩句はきつと常套句だ」と言うのだけれど、アンゲロニアは答えずに風の通り道をさけてこのハウスにやってくる時にであったロベリアに神謡を三度繰りかえさせて何かを伝えようとしているのだが「アンゲロニアよ、わたしの右手に持っている若葉が隠し持っている葉液のメタファーは明日海辺に漂着しようとしている寄りものが知っているはずだ」と丁寧語りかける姿勢をつらぬいて春空の天象を眺めていたところ、三度の繰り返しが終わったロベリアがスキップのようなにじり寄り方でわたしに近づき「わたしの右肩から生まれる蝶はだいあるーぐができるの」と喜色を浮かべて言うので、「アンゲロニアよ、茎が中空なら、花期には花毒にみちたやさしく悲しい民話が生まれるのにちがいない」と囁いたのだつた。あいかわらずためらいがちに呼吸をつづけるアンゲロニアはハウスを横走しながら自分の立ち位置を測りかねているように思われロベリアの肩を周回している二頭の蝶にきつとなにかを口伝しようとしているのに違いないのだけれど、風の雫がすこしずつ奇譚を嫌いはじめていたので次の餌は鳥建て神話にするしかないと思い始めて、次の部屋に向かうのだった。

◆しとやか

大橋愛由等

非現実の都市に撒いた石が雲を産む

（ツリガネソウを左手に誇らしげに持った赤い三角形は、ドアノブを右手で握りしめ、萎れて笑顔が消えたひとびとの日々をいとおしく想いはじめて戸外に出ようとしたら、道端でいきなり出会った静寂が今日の沈黙を万民に配ろうとして賦算していたので「おはよう、今朝の不条理は軽めの塩味でした」と伝えると「では今日もきちんと意味を毀してきたのですね」と応えたのに赤い三角形は少しく顔を赤らめ「乾く石は原文をもとめて旅に出ようとしているのです」「きつと東に向かうはずです。その方角には風たちが海藻を蒐めていますから」「それよりもギャモンを食べに行くたびに都市が浮遊してしまうのですが」「山で出会うイノシシが胎内に隠匿しているのは情況なのです」といったしとやかな語り合いを交わしていると、列柱に囲まれたパティオですつと小休止を続けている鴉たちが「あの水路を渡れない」とののしりあっているので「堂塔に登って見渡せば懐古が微笑むはずですよ」と進言したのだけれど、鴉たちは、水路に沈んだモロッコ革の古装本から逃げ出している文字の群れがアポリアを投げつけてきたり、乾く石が飛ぶことを忘却させようと月をそそのかしたり、風たちが蒐めている海藻がわたしたちの黒を剥奪してしまおうとしてしている……などのべつなく喋りつづけるので今日の沈黙をほんのわずかお裾分けしているうちにその場にいずらくなり、ずつと遠方に見えている鉄錆びた小橋を渡って水路を越えていこうとしていた。急ぎ足が分からないようにしながら。

◆ある日東京で

月村香

殺傷にくすりをすり込むとしばらくして
感じるのがいいそれは雨の零時の霊的な
香りとともに宿ったこそそとした微か
にゆれる遠いタンブルに似た音を立て
しんしんと傷口に雪塊を注入してゆくよ
うだもぞもぞとしたもぞめきがわたしの
布団でかつて出産したようにわたしもお
まえたちを生んだ地下水の水におぼれる
ことなく生きてゆけよ手につけた傷はマ
ンホールのふたをどけるときにつけたも
のかもしれない縛られ絶えず狂いなお狂
っていたわたしもわたしに殺されかけ逃
げ花草の気配でふつとかけてきた足を止
めてみるそうということも昨日マリエンバ
ードで起こったことだドラマには哲学が
ありそのほんのささいな哲学にそんな
も気づいていなかったのかと夢見るある
日東京で雨が降っていたとしようそのと
き食器乾燥機が時を同じくして動いてい
たか興味はないか

◆春うらら夢

岩脇リーベル豊美

時熟する明石天文台の梅

春うらら時の最少単位で夢想

林檎割る真実半分から褐色細胞

毛皮売り三十年戦争後の店じまい

アフガニスタン米兵友達申請拒否

因果律初めて出逢う悪魔かな

凍死体食う鴉の字の部首が無傷

わが星座われに鋭角オポジションとる

星回りで死刑最中葉が効かない

研究発表の徹夜原稿を置き忘れる

墓地横切り親展と贈る花の写真

女性名詞とり違えたとき気づき鶴

鈴蘭通りパーラーに入らず竹林

高齢娼婦は若い外国娘を突き飛ばす

骨埋まる壺並ぶ五色山や古墳海風

四十雀啼きかた真似て喪が明ける

◆ ときのまうえから

From Above the Time

北岡武司

雲ながれ
ときながれ
草むらに寝ころび
空を仰いでいると
見えてくる

腫が見えてくる
みおろしている
地上をのぞき
ほほえみかけている
見あげれば 目と目があう

雲ながれ
ときながれ
わたしのとき

わたしを容れたとき
見えてくる

そらよ くもよ ときよ
ほんによろこべ
みんなやさしく
見つめられている
永遠がふりそそぐ

きらめく空に
かがやく雲に
雪を溶かし
ひこばえに命をあたえ、
若芽をひらく「とき」に

永遠がふりそそぐ
見るだけでうれし
うれしと思うわたしがうれし
かなたから
いたるところに まなざし

ときのまうえから まなざし
見つめあおう

一読後、巫女という言葉が自然に浮かんだ。巻末に近いところにある詩、「船霊さん」に登場する南九州の離れ島のお婆さん、シノさんの言葉、「乗るときにはなあ船霊さんにちゃんと頼まなアカンよ」が、自ずと巫女の口寄せを連想させたのかもしれない。しかし、シノさんではなく、この詩集全体にわたって、詩人の福田知子は巫女の役割を務めているように思う。

詩集は五部からなり、第一部「あけやらぬ みずのゆめ1」、第二部「雨の底から 樹の底から」、第三部「夏に出会う」、第四部「あけやらぬ みずのゆめ2」、第五部「入り江から」と表題されている。

それぞれの部が四から六の詩編から成り、すべてに死者と生者を繋ぐ役割を詩人の福田知子が引き受けている。

芭蕉は、「物の見えたるひかりいまだきえざる中にいひとむべし」と言ったと伝わるが、死者と生者の繋がる瞬間は、まさに短い煌めきを過たずにキャッチする能力を必要とするだろう。それが巫女を連想させる。

例えば、第一部の詩「はなびら」を見てみると、「アイリは姉 死んでいる／ジュリは妹 生きている／ジュリがお菓子を買うときはいつもふたつ／アイリのミルクチョコとジュリのいちごみるく(略)」と続き、死者と生者が分かちがたく結びついている世界が突然始まる。その理由は第三連の「津波がごおっとやってきて／はなびらのように魂 抜いて…った。」で明らかになる。

福田知子は、この第三連の詩句を末尾において次のように語る。『あるときTVを観ていたら、次のような言葉に驚く。「津波が魂を抜いていったんだ。花びらのようにな…」。当事者の村人の「花びら」という比喩にさらなる衝撃。』

この言葉が、まさに「物の見えたるひかり」をキャッチした瞬間だ。そこから、いまだきえざるうちに言い留めるべく、詩語が展開される。死者と生者を繋ぎとめようと、巫女としての福田知子の役割が始まる。

だが、死者と生者はなぜ繋がなければならないか？ こう書くと、生者のために死者があるように響

書評

くかもしれないが、実質、生者は否応なく死者と繋がれてしまうはずだ。にもかかわらず、そう言ってしまった瞬間が生者にはある。そうした、是非のない問いかけに福田知子は詩の末尾で次のように語る。「アイリの魂どこにいったの？／津波とともに海の彼方にかえってしまっただけの？／ちがう ちがう」とジュリは言う／鍋の中のたまねぎ にんじん じゃがいも きやべつ／それから 魂の骨と肉／鍋の中／アイリと／ジュリと／お母さん／三つの魂は一緒にあって／美味しそうな匂いを放っているのだ」と。

なんとなく、魯迅の「故事新編」にある「鑄劍」を思わせるような最終連だが、憎悪と恨みに満ちた魯迅のクライマックスに比べて、穏やかな生者と死者の繋がりが実現しているのは、巫女として詩人が引き寄せた言葉の功徳ではある。

福田知子詩集

『あけやらぬ みずのゆめ』

野口裕

別の詩を見てみよう。第四部の最終詩「鹽の種」は、死がいかに生を膨らませるかについて、塩がまるで植物の種であるかのように書くことで、死から生へと伝わる思念を寓意化している。ここでは巫女の口寄せというよりも魔女の秘薬に関するレシピに近いかもしれないが、塩を鹽と書くのもレシピの一部だろう。

鹽は、死と読み替えてもよいかもしれない。したがって、死が生として復活する道筋は埋葬を思わせる儀式を伴いつつ進行する。「掌に土を盛り鹽の種を蒔く／凍るほどに冷たい水をじょうろに充たし／はらはらと水をこぼし土を湿らす(略)」。こうした努力の末に、鹽の種は「ふつくらと ゆるやかに 膨らみ始める」。

第三連の、死から生が膨らみ始める海のイメージは美しい。「ここは 海／いくつもの 掌／私だけのものではなく／あなただけのものもなく／珊瑚のようにじつと潮騒を聴いている／掌から伸びる芽 ここからも

あそこからも／伸びる 無数の芽／静かにしかし力強く種の殻を破って。」詩人が、物の光を見ることに成功したのが如実にわかる。

この詩は、「あけやらぬ みずのゆめ1」と「あけやらぬ みずのゆめ2」のすべての詩にある死者を、生者に繋ぎとめるべき総決算の意味で置かれているように見える。このためか、詩の後半は、冥界で息の続かなくなったオルフェウスに見える面がある。しかし、無事にオルフェウスは此岸にたどり着いたと読み取れる。

最近読んだ本に、山崎正和の『リズムの哲学ノート』がある。彼はこの本で、森羅万象に偏在するリズムを取り上げ、そのリズムを世阿弥の序破急を援用しつつ、庭園によく置かれている鹿威しで説明している。竹筒に水が注がれて、一見静かな状態が続くときが序。水が竹筒に満ちて、ゆっくりと回転し始めた瞬間が破。竹筒が回転しきって、石を叩くときが急。そして、また序に戻る。

彼によれば、こうしたリズムが世界のいたるところで顔を出すのは、竹筒にそそぐ水のように流動し続けてやまぬものが根底にある、ということになる。注目してみたいのは、詩人にとっては、竹筒が石を叩く瞬間だけではなく、序も破も急も物の見えたる光になるのではないか、ということだ。

福田知子が「水の世界」で、「地面の下で嗅覚は待っている／水の夢がひらかれるのを／今夜 凍りつくという／それは 水の夢からの伝令／つっぱり つかえ つまづき／沁みだした 叫びのような…／(略)」と書いた世界は、まさに序から破急への変貌を希求している状態を言い留めているが、それを書けた詩人は、まだ起こっていない破急を見据えつつ序を丹念に綴っている。

生から死の瞬間は、まさに序が破急と移行する途上だろうが、生と死を繋ぐ巫女の仕事は、序破急すべてに渡っている。一冊の詩集は、のつべらばうな生の表面に、何回もこつんこつん、メメントモリを打ち込んでく

◆始まりと終わりのない記憶

高谷和幸

蝶が二頭飛んでいる
いつもではない
いつからか
胸(プレート)のゆがみもどされる
そんな時が許されるだろうか
垂直の壁を十二の幼虫が登り
何日も何も口にせず
身体の色が変わっていく
そんな時間を
飛んでいたのはあなたで
もう一つは違うあなたである
そんな時間を
見つめていた

◆※V

高谷和幸

古い家は
横殴りの風に
がたがたと音をたてていた
狭い部屋の空気につつまれる
わたしたちはむきあい
ただ黙って
ことばの墓地にいる
あなたは歌っている
息(ブレス)の橋(ブリッジ)が架けられ
歌っている
忘れていた名を
声にだすことが出来ない
驢馬の背中が
風を中心に
ひかれていく

※記譜法においてVは息つきを意味する

◆狭間は母里にあつた

大西隆志

熱があつたからか
一瞬に世界が回転
逆さになった場所
布団の中から退行
洞窟のような空間
にパジャマで蹲る
北南の方角を決め
脱出を謀ってみる
星は物語を語らず
切株の残った田の
藁積みされた隙へ
僕の家族ではない
叔父叔母の土地は
逆さになっていた
市営バスの切符は

売れ残ってしまい
ここから街に転れ
一日一便のバスは
池の上を渡っては
何度かの坂を上下
世界は逆さになり
点滅しながら走る
声をかけてみよう
一人だけの時間に
縁側の戸の隙間に
差し込まれた付録
学習雑誌の凶案に
爆発する流れ星や
帰る場所はどこか
藁の中の世界の孔
閉ざされた板戸に
月の光が射し込み
穿たれた時が立つ

メモ・母里は兵庫県加古郡稲美町の一地域。

◆階段の踊り場から

——高谷さんへ

木澤豊

ほんと ごろごろ石の荒れ野が見えるんです
ことばが集まっついて
すぐそばでみえました
満州って国でしたよ

なんか 国か ちゅうと
思ってみりや
天国です

ほんとにあるわけに わけ
たしかに《手のある部分だけが》
陽が照っていました
たしかに海峡で
鳶がひよろろと鳴いていましたですよ

うん ところが屈折していったっ
燃えてたけど 冷たかった
おれには 思い 領土でした

父とか叔父とかいて
間近い夕陽に 照っていました

石の影が

黒かった

曠野はまだらです

いまも

ね

とおくで小さい鳥影がはばたくとき
おれも羽ばたいてました

そう 詩って

だれもがこたえるものですから

文字に

変わった です

《さざなみが

乱反射して》

泣いてた

あの子

鳥も鳴いてたです

◆ナンデエという丘から

木澤豊

おっ おっ
港の巨船が火を噴いて
わたしは 山手から見ている
その中間に波止場が見えるんだよ な

水道工事の 赤土の巨大盛り土に
雪が降る ふるふる 雪がふる

いつしよに

赤い火玉ふる

青い火玉ふる

そのあと

雨がふるふる

白い浜にさ

そうさな 降るんだよ

黒い棒のようなもの無数

虚数だったのかな

しかし な

にんげんが燃えて

みんな棒になったよ

なんでえ

おめえんここ

天国か

いや

煉獄 いや いやだねえ

くるまがでえでえたくさん通る

ここ

なんです

ヘルなんです

どこへ行こうかな

港の巨船が大きな火を噴いて

もくもく 黒煙 立ち上らせ

だれが昇ると言ったか

へんな棒をのぼると
言ったか

うた 神戸詞あしび

122-2018.05.27 大橋愛由等



沖縄戦の終結後、米軍将校の希望によって両手の甲に施された針突(タトゥー、ハツキ)を見せる沖縄のおばあち(鳥飼行博研究室のサイトより引用)

もの、そうしたもの、そのた伝令はすべての兵士に伝わるはずもなくその後も散発的な戦闘は続いていた。しかし非戦闘員は組織的闘闘が終わろうが、その日も次の日も食べてい

失うことによって自覚されることがある。五月六日、西宮で開かれた兵庫県現代詩協会の総会において、わたしが「沖縄詩が撃つもの―詩・言葉・思想」と題して講演を行った。詩を含めて、沖縄の文学全体に通底するのは、戦前と戦後によって大きな断層があるということである。太平洋戦争の末期、沖縄は地上戦の舞台となり、米軍を主体とした連合軍と日本軍との熾烈な闘いが展開され、沖縄は本島を中心に焦土と化した。すべてが破壊されたあと、ウチナーンチュにとつての戦後は、米軍が設置した捕虜収容所での生活からスタートすることになった。食糧はなんと与えられないもの、同収容所から勝手に外出することは禁じられた。そうしたなかでも詩作は行われた。牧港篤三は、「わたしはたしかに生きていた：(略)：わたしたちは残る生涯を通じて語りおわせない/数多くの物語を/たった百日たらずの戦乱に身一杯/背負い込んだ」と「手紙」という作品に書き記している。一九四五年六月には日本軍による組織的戦闘は終結した

沖縄文学の戦前戦後の断層は今も続いている

かなくてはいけない。戦前から活躍した詩人たちが生き残った者にとつて、詩作よりその日を生き抜くことが優先された。こうしたすべてを破壊しつくした沖縄戦を経験すること、詩をふくむ沖縄文学は大きく変わった。戦前は、「沖縄の文学活動は、中央の文壇をモデルとして、それと同質のものを表現しようと図ったところに一つの特色を見出すことができる。中央の文壇文学に近づくところに努力の重点があった。」(岡本恵徳著『現代沖縄の文学と思想』(沖縄タイムス社)であったのが、「戦後の文学は、それとは逆に、沖縄の自ら担う独自の対象化し、それをふまえたところで作品を創りだそうと試みているというところにあるといえるであろう。」(同)と変化していくのである。つまり沖縄は失うことによって自らの特性を自覚するようになつた。そしてこの傾向(沖縄が沖縄自身を強く自覚すること)は、沖縄の米軍政府による理不尽な沖縄統治と、現代にいたるまでの「沖縄差別」と糾弾せざるを得ないほどの日本国家と米国の強圧的な諸政策によって強まることであつても、弱まることはない。講演では本土でもよく知られた詩人・山之口鏡の作品を取り上げた。沖縄の詩人たちの詩と言葉に関して語るためである。鏡はひとつの詩作品を書くのに、二百枚ほどの原稿用紙を反古にしたことでも知られている。それは詩人としての言葉(詩語)との格闘であると同時に、沖縄語(シマクトウバ)と日本語の格闘の経緯であるとの分析がある。「ニッポンゴで書くことは、一種の翻訳行為をくぐらなければならなかつたということである。(間一言語)としか言いようがない奇妙なねじれと彩のようなもの、そこに鏡の詩作はあつた。」(仲里効著『悲しき垂言語帯』(未来社))との指摘は鋭い。沖縄の詩人たちにとつて、シマクトウバ(シマフツ)と日本語との確執はいまでも深刻なテーマであり、アボリアなのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.133
神戸

2018年05月27日 通巻133号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)